

# 幼児の道徳判断とその発達

## Moral Judgment of the Child and its Development

(1999年3月31日受理)

加藤 泰彦 宮川 洋子  
Yasuhiko Kato Yoko Miyakawa

Key words : 道徳判断 moral judgment, 自律 autonomy, ピアジェ Piaget

### abstract

Thirty 3-, 4-, and 5-year-old's were individually interviewed to find out if they develop in ways of moral judgment similar to the Genevan children in Switzerland.

Piaget (1932/1965) asked the children between the age of six and fourteen, whether it is worse to tell a lie to an adult or to another child. Young children consistently replied that it is worse to tell a lie to an adult. Piaget called it as Moral realism.

One type of Moral realism is defined in terms of the material result and the heteronomy to adults and the other in terms of motives and the autonomy. Like the Genevan children, Moral judgment of the Japanese preschoolers were found to begin with Moral Realism. We cannot divide the developmental stages clearly according to the age of the children. However, it cannot be denied that Moral Realism diminishes as the child grows older.

### 問 題

ピアジェ (1932/1965) はその著『子どもの道徳判断』において、第1章では「ビー玉ゲーム」を取り上げて「ルールの適用」と「ルールの性質」について、第2章では「過失」や「盗み」や「ウソ」に関する話しを2人の子供に聞かせ、どちらの子がより悪いかを聞いて子供の道徳判断を、第3章では3～7つの話を聞かせて罰、責任、正義、平等、権威等の意識とその発達段階を、第4章ではデュルケムやボールドウィンらの学説を引用して、自律と他律の道徳と社会的・感情的関係について考察し、子供の道徳判断の特徴とその構成過程を明らかにした。

本研究は、それらの包括的なピアジェの道徳研究の中から、特に第2章の子供の道徳判断の特徴

とその発達に焦点を当てるものである。ピアジェはまず「過失」の研究において、大別して2つのタイプの道徳判断を見いだした。一つはその行為がもたらす物質的な結果によって善悪を決める「結果論的」判断であり、もう一つは行為の意図によって決める「動機論的」判断である。また、「ウソ」の研究においては、ウソをつくと大人に叱られるから悪いと言う「他律的」判断と相手の信頼を裏切ることになるから悪いと言う「自律的」道徳判断である(Piaget, 1963)。そして、ピアジェは前者の子供の道徳判断を「道徳的リアリズム」Moral Realismと呼び、彼が面接した14歳までの子供の場合、ある年齢によるはっきりした段階の区切りはできないとしながらも、子供の道徳判断の特徴は他律的で結果論的であることを明らかにした(Piaget, 1965, p.124)。そこでまず、本論稿はピアジェの追試研究として、70年後の今もピアジェの「道徳的リアリズム」が日本の幼児に存在するかどうかを考察する。なお、ピアジェは主にスイス・ジュネーブの6歳から14歳までの男児20人を用いたが、本研究では3歳から6歳の男女30人を用いる。そして、ピアジェの明らかにした他律から自律へ、結果から動機へという道徳判断の発達の推移が今なお妥当なものであるかどうか、併せてそれらの発達過程をいくつかの発達段階に区分することができるかどうかについて考察する。

## 方 法

1 調査日 1998年5月15～18日

2 被験児 3, 4, 5歳児の30人

被験児は、福山市内の2つの私立保育園に在籍する3, 4, 5歳児の中から、特に条件を指定せず、任意に各10人ずつを抽出した。各年齢の平均年齢は、3歳児が3.9ヶ月、4歳児が4.7ヶ月、5歳児が5.8ヶ月で、男女比は3歳児が男児4人女児6人、4歳児が男児7人女児3人、5歳児が男児4人女児6人であった。

3 質問の手順と3つの課題

質問の内容は、ピアジェが『子どもの道徳判断』の第2章「大人の拘束と道徳的リアリズム」で用いた質問とほぼ同じ「ウソ課題」と「シミ課題」(ピアジェの「インク課題」に相当)と「横取り課題」(ピアジェの「盗み課題」に相当)を用いた。質問の手順はピアジェと同じである。なお、インタビューのすべては、後の考察のためにビデオに録画した。

(1) 質問の手順

子どもは一人ずつ保育室に入り、机をはさんで面接者と対面して座る。初めに面接者は子どもの名前を聞き、何気ないおしゃべりをしてリラックスしたところで、“では、今から先生の言うことをよく聞いて、あなたの考えを聞かせてね”と言って、以下に示すような質問をする。また、質問の内容が理解されているかどうか、必要に応じてその内容を確認する。なお、面接者は判断の手がかりとなるような問いかけはしないようにする。

(2) 3つの課題とその内容

①「ウソ」についての質問（「ウソ課題」）

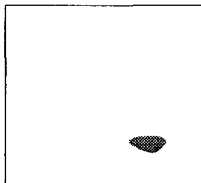
- ・面接者：ウソをつくのはよいことだと思う，悪いことだと思う？
- ・子ども：（答える）
- ・面接者：どうして悪いと思うの？
- ・子ども：（答える）
- ・面接者：じゃあ，先生（大人）にウソをつくの友達（子ども）にウソをつくのはどっちが  
たくさん悪いと思う？
- ・子ども：（答える）
- ・面接者：どうしてそう思うの？
- ・子ども：（答える）

②「横取り」についての質問（「横取り課題」）

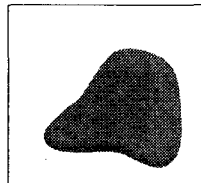
- ・面接者：ほかの人のおもちゃをとるのはよいことだと思う，悪いことだと思う？
- ・子ども：（答える）
- ・面接者：どうして悪いと思うの？
- ・子ども：（答える）
- ・面接者：じゃあ，大きいお兄ちゃんのおもちゃをとると赤ちゃんのおもちゃをとるとどっちが  
たくさん悪いと思う？
- ・子ども：（答える）
- ・面接者：どうしてそう思うの？
- ・子ども：（答える）

③「汚したシミ」についての質問（「シミ課題」）

- ・面接者：あるところにお父さんと男の子がいました。お父さんはお出かけをしましたが，絵の具を片付けるのを忘れてしまいました。男の子は絵の具をみつけて“あっ，絵の具だ，遊んじゃえ！”と遊んでいる内に，お父さんの白いテーブルクロスの上に絵の具をこれだけ（白い紙が少しだけ汚れている方の絵Aを見せる）こぼしてしまいました。



絵A



絵B

隣のお家にもお父さんと男の子がいました。お父さんはお出かけをしましたが、やはり絵の具を片付けるのを忘れていました。男の子は絵の具をみつけて“あっ、絵の具だ、お片付けてあげよう”と片付けている内に絵の具をこれだけ（白い紙がたくさん汚れている方の絵Bを見せる）こぼしてしまいました。あなたは（たくさん汚れている方の絵を指して）こっちの男の子が悪いと思いますか？こっち（少少だけ汚れている方の絵を指して）の男の子が悪いと思いますか？

- ・子ども：（答える）
- ・面接者：どうしてそう思うの？
- ・子ども：（答える）

※必要に応じて、子どもの答えを確かめるために話を繰り返して質問する。

## 結果と考察

### 1. 「道徳的リアリズム」は70年後の日本の幼児にも存在するか。

以下に示す事例からわかるように、全年齢を通じて、子供達の答えはウソもおもちゃの横取りもすべて悪いとしている点では共通である。しかし、なぜ悪いのかという理由付けになると子供達の答えには大きな違いがある。そこで、子供達の理由付けに焦点を当て、各課題ごとの事例を引用し、そこに「道徳的リアリズム」が見られるかどうかについて考察する。なお、ピアジェは道徳的リアリズムを示す3つの特徴として、他律的判断、結果論的判断、言葉どおりの規則の解釈を挙げている (Piaget, 1965, p.111)。しかし、以下に示す筆者の道徳的リアリズムの3つの定義は、ピアジェのそれと異なっている。すなわち、①と②は同じであるが③はそうではない。筆者の考えでは、「言葉どおりの規則の解釈」よりも「自己中心的道徳判断」の方が、よりよく幼児の道徳的リアリズムの特徴を表すものとする。そこで、以下の3項目に照らして結果を考察することにする。

- ① 大人や他者の権威や見解に基づく他律的な判断であるか、それとも自分自身の見解に基づく自律的な判断であるか。
- ② 物質的で外的な結果に基づく判断であるか、それとも心理的で内的な動機（意図）に基づく判断であるか。
- ③ 自分の立場を中心にした自己中心的判断であるか、それとも相手の立場を中心にした脱中心化した判断であるか。

#### ◇事例1：ウソ課題の「あおぞら」（4歳1か月）

- |                            |            |
|----------------------------|------------|
| ・ウソをつくのはいいことだと思う？悪いことだと思う？ | “わるいこと。”   |
| ・どうして悪いと思うか教えて？            | “おこられるから。” |
| ・じゃあね、先生にウソをつくの友達に         |            |

- |   |  |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>ウソをつくのはどっちが悪いと思う？</li> <li>・ どうしてそう思うの？</li> </ul> | <p>“せんせい！”</p> <p>“だって、バレておこられるから・・・。”</p> |
|---|--|

本事例における「あおぞら」は、“どうしてウソをついたら悪いと思うか教えて？”という面接者の質問に、“おこられるから”と答えている。また、“先生にウソをつくと友達にウソをつくのはどっちが悪いと思う？”の質問においても、“だって（ウソをついたら）先生にバレて怒られるから”と答えている。このように、「あおぞら」の道徳判断は、典型的な他律の道徳判断の特徴を示している。すなわち、「あおぞら」にとって、ウソは大人に怒られるから悪いのであって、道徳判断の基準は大人の叱責や権威に基づいているのである。

◇事例2：横取り課題の「かずき」（4歳3か月）

- |   |   |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ お友達が使っているおもちゃをかずき君が“使いたいなあ”って思ったらとっていいかな？</li> <li>・ だめ？</li> <li>・ どうしてだめと思う？</li> <li>・ じゃあ、“貸して”っていったらすぐとっていい？</li> <li>・ じゃあね、赤ちゃんのおもちゃをとると、おにいちゃんのおもちゃをとるのはどっちがたくさん悪いと思う？</li> <li>・ どうして？</li> </ul> | <p>(首を横に振る。)</p> <p>(うんとうなづく。)</p> <p>“何も言わないでとったらいけない。”</p> <p>(うんとうなづく。)</p> <p>“おにいちゃん。”</p> <p>“おにいちゃんだったらおこられるから。”</p> |
|---|---|

幼児の他律的な道徳判断は、事例1の「ウソ課題」と同様、「横取り課題」の「かずき」にも見られる。すなわち、“赤ちゃんのおもちゃをとると、お兄ちゃんのおもちゃをとるのはどっちがたくさん悪いと思う？”という面接者の質問に、“おにいちゃん、おにいちゃんだったらおこられるから”と答えているのがそれである。事例1の「あおぞら」と同様、「かずき」にとって、その行為が悪いかどうかは、権威のある者に罰せられるかどうかに基づいている。したがって、より強力により多く罰せられる可能性のあるお兄ちゃんのおもちゃをとるほうが、赤ちゃんのおもちゃをとるよりも悪い行為なのであり、ここでも典型的な他律的道徳判断が見られる。

◇事例3：シミ課題の「まさき」（4歳9か月）

- ・ あるところにお父さんと男の子がいました。お父さんはお出かけをしましたが、絵の具を片付けるのを忘れていました。男の子は絵の具をみつけて

- “あっ、絵の具だ遊んじゃえ！”と遊んでいる内に、絵の具をこれだけ（少し汚れている方の絵を見せる）こぼしてしまいました。
- ・ となりのお家にもお父さんと男の子がいました。お父さんはお出かけをしましたが、やっぱり絵の具を片付けるのを忘れていました。男の子は絵の具をみつけて“あっ、絵の具だ。お片付けてあげよう”と片付けている内に絵の具をこれだけ（たくさん汚れている方の紙を見せる）こぼしてしまいました。
  - ・ まさき君は（たくさん汚れている方の絵を指してこっちの男の子が悪いと思いますか？（少しだけ汚れている方の絵を指して）こっちの男の子が悪いと思いますか？
  - ・ どうしてこっちが悪いと思う？
  - ・ まさき君、先生の話をもう1度よく聞いてね。こっちの男の子は“あそんじゃえ”と思ってこれだけ（少し汚れた紙を指で差す）こぼしたんだよ。こっちの男の子は“お片付けてあげよう”と思ってこれだけ（たくさん汚れた紙を指で差す）こぼしたんだよ。
  - ・ では、まさき君はこっちの男の子が悪いと思いますか？それともこっちの男の子が悪いと思いますか？
  - ・ どうしてかな？
- （面接者の顔を見て、うなずきながらよく聞いている。）
- “うん”と言って紙をじっと見る。
- “こっち”と沢山汚れている方を指す。
- “えっとね、いっぱいこぼしたから。”
- “うん”とうなずく。
- （指された紙を見る。）
- （指された紙を見る。）
- すぐに“こっち”とたくさん汚れている方を指す。
- “えっとね、いっぱい汚したから。”

「シミ課題」が「ウソ課題」や「横取り課題」と違うのは、後者は言語的な問答だけで行われているが、「シミ課題」は実際にこぼされた絵の具が白い紙（テーブルクロス）に描かれたものを2つ用意し、子供の目の前で問答していることである。したがって、被験児はより具体的な形で絵の具をこぼした2人の行為について考えることができる。また、それは面接者に被験児が「道徳的リアリズム」の特徴である目に見える外的で物質的な結果に基づく道徳判断を行っているか、それとも目に見えない内的で心理的な動機に基づく道徳判断を行っているかをより明確な形で知ることを可能にする。

本事例における結果は歴然としている。すなわち、「まさき」はどちらの子がより悪いかという面接者の質問に、躊躇することなく、“いっぱいこぼしたから”と言ってたくさん汚れている方を

指している。そこで、もう一度面接者が2つの絵を指しながら、こっちの男の子は“あそんじゃえ”と思っていたし、こっちの子は“お片付けしてあげようと思っていたのよ”と説明したにもかかわらず、「まさき」はまたすぐに“こっち”とたくさん汚れている方を指し、迷うことなく“いっぱい汚したから”と繰り返している。したがって、「まさき」の道徳判断は明らかに結果論的であることがわかる。

以上のように、3つの課題共、幼児の道徳判断はまさに「道徳的リアリズム」そのものである。すなわち、「ウソ課題」と「横取り課題」に見られるように、彼等の道徳判断は大人や年長者の権威や罰の恐れに基づいているという点で極めて他律的であり、「シミ課題」に見られるように、物質的で目に見える行為の結果に基づいているという点で極めて結果論的である。ピアジェの明らかにした子供の「道徳的リアリズム」は、70年後においても、スイスと日本という国家や民族の違いを越えた普遍的な真理であるように思われる。しかも、これほどまでに明確な形で「道徳的リアリズム」を見いだすことができたのは、本研究ではピアジェの用いた6歳から14歳の子供達よりもより年少の3歳から6歳の被験児を用いたからだと考えられる。なお、本研究では被験児が少数のため年齢と「道徳的リアリズム」との相関については統計的分析を行っていないし、同一被験児でも3つの課題の答えが異なる例もあったので、「道徳的リアリズム」がどの年齢で始まり、どの年齢で終わるかについては一般化することはしなかった。しかしながら、被験児30名中、3歳児の全員、4歳児の8名、5歳児の6名が3つの課題のすべて、または二つ以上に他律的、結果論的、自己中心的な返答をしているので、大勢としては3～5歳児は「道徳的リアリズム」の段階にいると推定できよう。

## 2. 幼児の道徳判断の発達の推移とその諸段階

### (1) 道徳判断の発達の推移について

#### ◇事例1：かずき（4歳3か月）

- |   |   |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ウソをつくのはいいことだと思う、悪いことだと思う？</li> <li>・どうして悪いことだと思うか教えて？</li> <li>・じゃあね、ウソをついたらお父さんが怒るからかな、それともウソをつかれた人が困るからかな？</li> <li>・赤ちゃんにウソをつくのど……。 </li> <li>・お父さんにウソをつくのど赤ちゃんにウソをつくのど、どっちがたくさん悪い。</li> </ul> | <p>“悪いこと。”</p> <p>“あのね、ウソをついたら何がなんだかわからなくなるから。”</p> <p>“お父さんに怒られるから。”</p> <p>(すぐに面接者の言葉をさえぎって) “あかちゃんにはウソをついてもわからん。”</p> <p>“お父さん。”</p> |
|---|---|

◇事例2：あつこ（5歳1か月）

- ・ウソをつくのはいいこと？悪いこと？ “わるいこと！！”
- ・じゃあ、どうして悪いことだと思うか “ウソをつくといけない。”  
教えてちょうだい。
- ・なぜいけないのかな？ “あのね、お友達が信じてくれなくなるから。”
- ・それはお父さんや先生達におこられる “ううん。”  
から？それともお友達が信じてくれな  
くなるから？
- ・どっち？ “あのね、お友達が信じてくれなくなるから。”
- ・じゃあね、お父さんにウソをつくのとお友 “どっちも悪い。”  
達にウソをつくのは、どっちが悪  
い（面接者が言い終わらない内に）。
- ・どっちかっていったら、どっちがたく “(ちょっと考えて)  
さん悪い、お父さんとお友達？ “お父さんとか、お友達とか・・・。”
- ・やっぱり同じだと思うの？ “うん。”
- ・どうしてそう思うの？ “あのね、・・・”
- ・どうしてどっちも同じように悪いと思 “信じてくれなくなるし、返事もしてくれなくなる  
うのかな？ から”

◇事例3：ひろのり（5歳7か月）

- ・ウソをつくのはいいことだと思う、 “わるいこと！！”  
悪いことだと思う？
- ・じゃあ、どうして悪いって思うのか “ウソつくると他の人がだまされたりイヤだと思うか  
教えて？ ら。”
- ・じゃあね、お母さんにウソをつくのとお友 “うん？あのね…お友達！”  
達にウソをつくと、どっちが悪  
いと思う？ “お友達が嫌だと思うから。”
- ・どうしてそう思うか教えて？ “お母さんも嫌がる。”
- ・じゃあ、お母さんは？
- ・じゃあ、お母さんにウソをつくのとお友 “お友達。”  
達にウソをつくと、どっちが  
悪いと思う？
- ・やっぱりお友達なの？どうしてお友達



- |                    |                       |
|--------------------|-----------------------|
| にウソをつくほうが悪いのかな？    | ：“お友達が嫌がるから・・・。”      |
| ・でも、お母さんも嫌がるんでしょう？ | ：“うん。”（うまく説明できないようす。） |
| ・それでもやっぱりお友達？      | ：“うん。”（はっきりと。）        |

上記の3つの「ウソ課題」の事例の内、事例1の「かずき」の答えは明らかに他律的な道徳判断を示している。すなわち、“ウソをついたらお父さんが怒るから、それともウソをつかれた人が困るから？”という面接者の質問に、“お父さんに怒られるから”と答えているのがそれである。「かずき」にとって、ウソをつくのが悪いのは、ウソをつかれた人が困るからではなく、自分がお父さんに叱られるから悪いのである。したがって、そのウソに罰せられる可能性がなければ悪くないのである。その証拠に、続けて面接者が“赤ちゃんにウソをつくのど……”と問いかけると、すぐに面接者の言葉をさげぎって、“赤ちゃんにはウソをついてもわからん”と結果論的な答えをしている。これはピアジェの言う最も典型的な「道徳的リアリズム」である。すなわち、他律的であると同時に自己中心的であり、結果論的なのである。

次に、事例2の「あつこ」の答えは、大人に“怒られる”からという他律的な理由によらないで、自分自身の判断による自律的なものであるのが特徴である。すなわち、ウソをつくのが悪いのは、お父さんや先生達におこられるから？という面接者の問いに、“ううん”と答え、その理由を“お友達が信じてくれなくなるから”と答えているのがそれである。また、事例1の「かずき」とは異なって、「あつこ」は叱られなければ悪くないという結果論的な道徳判断からも抜け出ている。しかし、「あつこ」の答えが脱中心化したものであるかどうかに関して言えば、まだ自己中心的であると言わざるを得ない。というのは、「あつこ」の“お友達が信じてくれなくなるから”という答えは、まだ相手よりも自分が困るという自分の立場や利益にその判断の基準を置いているからである。さらに、「あつこ」は“お父さんにウソをつくのとお友達にウソをつくのはどっちが悪い”という面接者の質問に、“どっちも悪い”と答え、“どちらかと言えばどっちがたくさん悪い”という次の質問にも、両方とも“同じだけ”悪いと答えている。これは大人にウソをつく方が赤ちゃんにウソをつくより悪いと答える事例1の段階よりは進んでいるが、しかし、大人にウソをつくのも悪いが、より弱者である赤ちゃんや友達にウソをつくのはもっと悪く、もっと罪深いウソであるとする次の段階ほどには進んでいない。そういう意味で、「あつこ」の道徳判断は、他律的でも結果論的でもないが、まだ自己中心的だと言える。

一方、事例3の「ひろのり」の答えは、他律的でもなく結果論的でもないばかりか、自己中心的な道徳判断からも抜け出ている。というのは、ウソをつくのが悪いのは、「あつこ」のように、友達が“信じてくれなくなるし返事もしてくれなくなるから”ではなく、“お友達が嫌だと思うから”である。つまり、「あつこ」とは反対に、「ひろのり」は自分よりも相手が困るという観点にその判断の基準を置いているのである。しかも、「ひろのり」は友達にウソをつくのは大人にウソをつくよりもたくさん悪いと答えている。そういう意味で、「ひろのり」の道徳判断は十分に脱中心化している。したがって、「ひろのり」はすでに「道徳的リアリズム」の段階を抜け出ていると言えよう。

②「シミ課題」

◇事例1：かずとし（5歳8か月）

- ・あのね、かずとしくん、あるお家にお父さんと男の子がいたの。お父さんはお部屋でお仕事をすませてからお出かけをしたの。でも、お父さんは絵の具を片付けるのを忘れちゃったの。
- ・男の子はお父さんのお部屋に入ってきて、“あっお父さん、絵の具を片付けるの忘れてる。お片付けてあげよう”と片付けていたら絵の具を机の上の布にバーッてこぼしちゃった…。(といいながらたくさん汚れているほうの紙を見せる。)そして、このきれいな布をこんなに汚してしまいました。
- ・でもね、となりの家にもお父さんと男の子がいてやっぱり、お父さんは絵の具を片付けるのを忘れてお出かけしちゃったの。すると、男の子がお部屋に入ってきて“あっ、お父さん、絵の具を片付けるの忘れてる。遊んじゃえ!”と遊んでいるうちに絵の具をちょっとこぼしちゃって、こんなふうになったの。(少し汚れているほうの紙を見せる。)
- ・ぼくはこっち(たくさん汚している)の男の子とこっち(少し汚している)の男の子とどっちが悪いと思いますか？
- ・こっちの男の子の方が悪いと思うの？
- ・どうしてそっちの男の子のほうがこっちの(少し汚している)男の子より悪いのかしら？
- ・こっちの(少し汚している)子は？
- ・じゃあ、ぼくはたくさん汚している男の子のほうが悪いと思うのね？

(うなずきながらよく聞いている。)

(紙をじっと見る。)

(うなずきながら紙を見る。)

すぐに“こっち”とたくさん汚しているほうを指す。

“うん。”

“あのね、たくさんこぼしたからお父さんに怒られるから。”

“ちょっとだけだから、怒られない。”

(おおきくうなずく。)

◇事例2：ひろし（5歳5か月）

・あなたの考えではこっちの（たくさん汚している）子のほうが悪い子ですか？こっちの（少し汚している）子のほうが悪い子ですか？どっちが悪い子だと思いますか？

たくさん汚れているほうの紙を見つめるが、“こっち”と少し汚れている方を指す。

・ どうして？  
・ 这边的（少し汚している）子もこぼしたんよ。もう1度言うと、这边的の子は“遊ぼう”と思っ  
てこぼしちゃったの。这边的の子は“片付けてあげよう”と思っ  
てこぼしちゃったの。

“だってね、絵の具をこぼしたから…”  
(無言)

・ どうして？  
・ もう1度聞いてみたいんだけど、这边的の子は、“遊ぼう”と思っ  
てちょっとこぼしちゃったの。这边的の子は“片付けてあげよう”と思っ  
てこんなたくさんこぼしちゃったの……。

面接者が言い終わらない内に、“じゃあ这边的の方がいい子”と少し汚れている方を指す。

“だってさー、ちびっとしかこぼしてないから……（自信なさげに）。”

・ ……本当はどっちの子が悪い子？  
・ どうして？

(遠くを見つめ、考えているようす) 面接者が言い終わらない内に“どっちとも悪い……”。

“这边的”と少し汚れているほうを指す。少し考え“やっぱり这边的のほう”とたくさん汚れている方を指す。

・ どうして？  
・ でも、先生は这边的の（たくさん汚している）子の方がよい子だと思うんだけどなあ。どうしてか  
という、这边的の子は“遊んじゃえ”と思っ  
てこぼしたけど、这边的の子は“お片付けてあげよう”と思っ  
てこぼしたんだから…。だから这边的の（たくさん汚している）子のほうがいい子だ  
と思うんだけど、僕の考えではどう？

“えーとね、いっぱい汚したから。”

“やっぱり这边的！”とたくさん汚れている方を指す。

◇事例3：こうたろう（5歳10か月）

- ・ こっちの（少し汚している）子は“遊んじゃえ”  
と  
思ってこぼしたの。こっちの子（たくさん汚し  
ている）は“片付けてあげよう”と  
思ってこぼしたの。どっちの子が悪いと思う？
  - ・ どうしてそっちの子の方が悪いと思うの？
  - ・ でも、こっちの方がたくさんこぼしてるよ。それ  
でもやっぱりこっちの（少し汚している）子の方  
が悪いの？
  - ・ （もう一度）どうして？
- （2枚の紙を見比べて考え、すぐに少し汚  
れているほうを指す。）
- “あのねこっちの子（たくさん汚してい  
る）は片付けてあげようと思ってこぼした  
けど、こっちの子は遊んじゃえと思ってこ  
ぼしたから。”
- 当たり前とばかりに大きく、“うん”とう  
なずく。
- “だってさー、こっちの子は片付けてあげよ  
うと思ってこぼしたんだもの”と身振り手  
振りし、大きな声で面接者を説得するよう  
に言う。

上記の3つの「シミ課題」の事例の内、事例1の「かずとし」の答えは明らかに結果論的で他律的な道徳判断を示している。すなわち、面接者のどっちの子がたくさん悪いと思うかという問いに、すぐにたくさん汚れている方を指し、その理由を聞かれると、“たくさんこぼしたから、お父さんに怒られる”と答えているのがそれである。「かずとし」はこれらの話の顛末を正しく理解しているにもかかわらず、これを道徳的に判断するとなると、目に見える物質的な結果のみを考え、その行為の背後にある心理的な動機や意図は全く考慮に入れていない。これもまた、「ウソ課題」における事例1の「かずき」と同様、最も典型的な「道徳的リアリズム」の例と言えよう。

次に、事例2の「ひろし」の答えは、結果論的な判断と動機論的な判断の狭間を揺れ動いているのが特徴である。これは、何をしていて絵の具をこぼしたかについて面接者が再度説明したにもかかわらず、迷うことなく大きなシミを指した事例1の「かずとし」との大きな違いである。このことは、「かずとし」が結果についてしか考えられなかったのに比べて、「ひろし」は結果と動機という2つの要因を同時に考え合わせることができるようになったことを意味している。すなわち、大きな汚点は小さな汚点よりも悪いが、お片付けをしていてこぼしたのは遊んでいてこぼしたのよりは善いという結果と動機の矛盾が彼を迷わせているのである。この葛藤は明らかに進歩の前兆である。と言うのは、ピアジェが「均衡化の理論」で明らかにしたように、矛盾と葛藤こそが進歩の動因だからである(Piaget, 1971)。しかし「ひろし」は最終的に、“やっぱりこっち!”とたくさん汚れている方を指し、結果論的な道徳判断の優位を示した。

一方、事例3は、典型的な動機に基づく道徳判断の事例である。「こうたろう」の答えは、彼が目に見えない心理的な動機や意図について考えることができるようになった点では事例2の「ひろし」と同様であるが、しかし、「こうたろう」にとっては結果と動機は矛盾する2つの要因ではなく、行為の動機こそが唯一の道徳判断の基準である。したがって、「ウソ課題」の「ひろのり」と同様、「こうたろう」はすでに「道徳的リアリズム」を抜け出ていると言えよう。

以上の結果から、幼児の道徳判断は、明らかにピアジェの指摘したように、他律的判断から自律的判断へ、結果論的判断から動機論的判断へと推移し発達することがわかる。すなわち、「ウソ課題」からわかるように、社会的には大人との一方的で権威的な尊敬に基づく他律的判断から、平等で相互的な尊敬に基づく自律的判断へ、「シミ課題」からわかるように、知的には外的で観察可能な知覚に基づく判断から内的な思考に基づく判断へと進歩するのである。

## (2) 道徳判断の発達段階について

ピアジェは6歳以上の子供の「ウソ」の発達段階について、第1段階：ウソは大人に罰せられるから悪い、第2段階：ウソは罰せられなくても悪い、第3段階：ウソはお互いの信頼を裏切るから悪いという3つの個別的な発達段階を明らかにしたが (Piaget, 1965, p.171)、認知発達における4つの発達段階説のように、道徳判断の発達段階を特定していない。そこで、すでに筆者の考察で用いた他律的-自律的、結果論的-動機論的、自己中心の-脱中心的という「道徳的リアリズム」の3つの特徴を基礎にして解釈すると、次のような3～5歳児の一般的な道徳判断の発達段階を見いだすことができる。

### ○第Ⅰ段階：他律的、結果論的、自己中心的な道徳判断

この段階の道徳判断は、大人や年長者の権威に基づいているという点で他律的であり、物質的で外的な目に見える結果に基づいているという点で結果論的であり、相手の立場よりも自分の立場を中心としている点で自己中心的である。すなわち、典型的な「道徳的リアリズム」の段階であり、ピアジェの言う「他律の道徳」の段階である。

### ○第Ⅱ段階：自律的、半動機論的、自己中心的な道徳判断

この段階の道徳判断は、大人や年長者の権威ではなく、自分自身の見解にもとづいているという点で自律的である。さらに、外的で目に見える結果だけでなく、行為者の内的で心理的な動機にも目を向けることができるようになるが、しかし、子供達の答えが両者の間を揺れ動き相半ばするという点で半動機論的である。一方、自己中心的かどうかに関していえば、子供達はまだ相手の立場よりも、自分の立場に基礎を置いている点で自己中心的である。すなわち、この段階は「他律の道徳」から「自律の道徳」への移行期の段階である。

### ○第Ⅲ段階：自律的、動機論的、脱中心化した道徳判断

この段階の道徳判断は、自分自身の見解に基づいているという点で自律的であり、行為者の内的で心理的な動機に基づいているという点で動機論的であり、自分の立場よりも相手の立場から判断しているという点で脱中心化している。すなわち、「道徳的リアリズム」を抜け出した「自

律の道徳」の段階である。

なお、以上の3段階説が幼児の一般的な道徳判断に妥当なものであるかどうかについては、今後さらに多くの被験児のデータの分析と縦断的な研究が必要であることを付記しておきたい。

## 引用文献

- Piaget, J. (1965). *The moral judgment of the child*. New York : Free Press. (Original work published 1932)
- Piaget, J. (1963). *To understand is to invent* Patterson, N. J.: Littlefield, Adams & Co., 1963 (first published in 1947). New York: Free Press. (Original work published 1932)
- Piaget, J. (1971). *Biology and Knowledge*. Chicago: University of Chicago Press, 1971 (first published in 1967)